

延喜式内社

水尾神社

みよのかみのやしろ

三尾氏の祖神を祀る社

出世、経営、安産、子授の大神

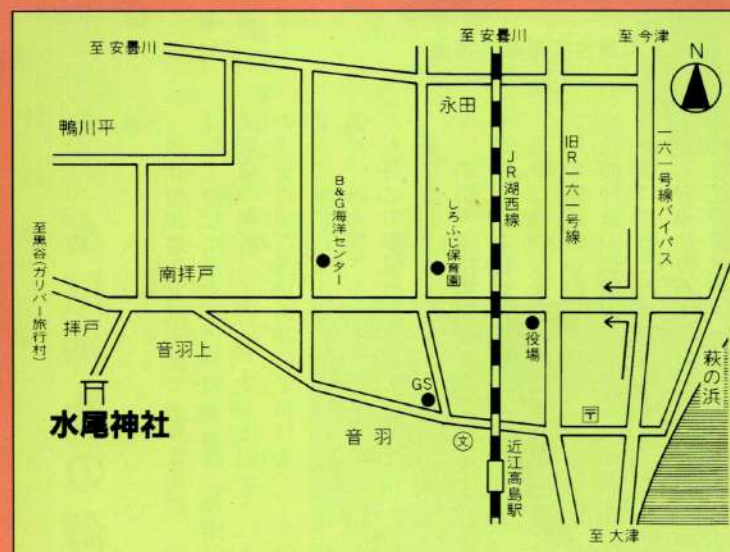
交通案内

● J R 湖西線

近江高島駅より畑行バス乗車約十分 下拝戸バス停下車

● 名神京都東インター下車湖西道路經由車で約一時間

● 北陸自動車道木之本インター下車湖周道路經由車で約四十五分



〒520-1132

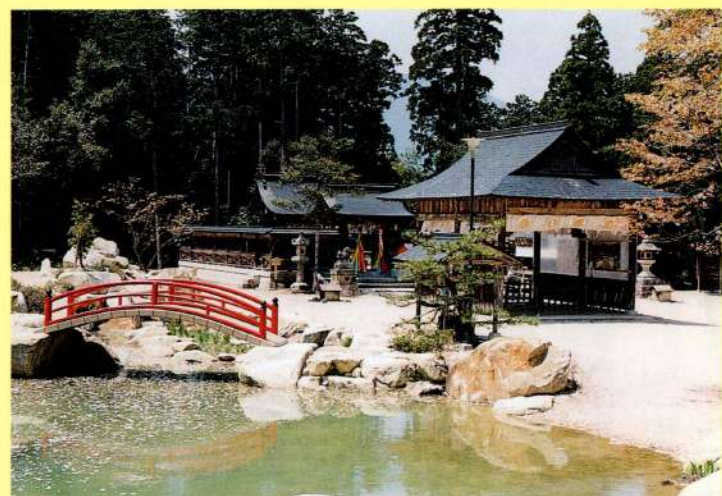
滋賀県高島郡高島町大字下拝戸716

水尾神社々務所

TEL&FAX 0740 (37) 0316

水尾神社

滋賀県高島郡高島町押戸鎮座



▲ 社殿全景と水尾庭園

御祭神

南本殿 磐衝別命（垂仁天皇の第十皇子）
北本殿 比咩神（継体天皇の御母君振姫命）

上押戸鎮座の北本殿は台風のため倒壊したので昭和四十六年十二月南本殿の向つて右側に小社を建て遷座申し上げました。

神紋

神 菊
境内社 神明神社、天照皇大神、豊受大神

八幡神社、応神天皇、速総別命（応神天皇の第十一皇子）

速総別皇子当地に來住して深く水尾神社を尊崇あそばされたので、後ち皇子の御座所（水尾御所）跡に社殿を造営して天皇と皇子を奉祀したもので、後年現在地に遷座されました。

秋葉神社、火結命

天正十五丁亥年遠州秋葉山本宮より勸請創祀されました。

以上の三社は境内に各別棟でありましたが、明治四十四年二月十四日一棟に纏められ現在地に奉祀してあります。

境内建造物

本殿（流造り）、中門、玉垣、拝殿、神輿庫、社務所、社標、一の鳥居、二の鳥居

境内坪数 二千二百八十一坪

水尾神社の由緒

延喜式所載の式内社

水尾神社は水尾川（今の和田内川）を隔てて河南社と河北社（現在は河南社境内に遷座）の二社あり、河南社本殿の御祭神は人皇十一代垂仁天皇の第十皇子磐衝別命。また河北社本殿の御祭神は人皇二十六代継体天皇の御母君振姫命であります。

磐衝別王は猿田彦命の天成神道を学ぶため猿田彦を祀る当地に來住され、朝夕猿田彦命を祀る三尾大明神（今の永田村の長田神社）を遙拝されたので、この地を拝所と称し、その御住居を土地の人は拝所御所と云っていました。

磐衝別王は当地で亡くなったので、その御子の磐城別王は背後の三尾山の中腹山に葬り、父君を奉斎する水尾神社を当地に創建されました。

それから約百年後に人皇十五代応神天皇の第十一皇子速総別王も天成神道を学ぶため押戸に來住されて、その四世の孫彦主人王は磐城別王の五世の孫振姫を迎えて妃とし、振姫は当社の拝殿を産所として天迹部王、男迹部王、太迹部王の三児を同時に安産されました。太迹部王は後の人皇二十六代継体天皇であります。

河北社は三児出産の時、父の彦主人王が北の仮社を建てて北極星に安産を祈られた仮社跡に、天迹部王が両親を奉祀する三重生大明神を創建されたもので、後年これが河北社として比咩神（振姫命）のみを祀る社となりました。



五月三日

豊年太鼓奉納

（水尾太鼓保存会）



水尾太鼓保存会による
例祭奉納太鼓
（五月三日）

悠久の歴史を育む水尾の郷に鎮る古社

水尾神社は高島郡の総社として、又、その根幹をなす三尾君の祖神を祀る社として、そのご霊験あらたかであり、御祭神は統治者、政治家、経営者など人の長たるべき人の神、又、出世の神として、更には安産、子授け、厄除けの神として崇敬されてきました。

十二月三十一日	十一月二十三日	十月十七日	九月十八日	九月十五日	六月二十六日夜	六月初旬	五月三日	四月十五日	三月十六日	一月十五日	一月一日
大	新	秋	秋	戦	敬	百	泥	例	鎮	祈	左
被	嘗	正	葉	没	老	燈	落	火	年	義	旦
式	祭	月	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭

祭事暦抄



▲ 8代將軍吉宗奉獻の神輿



▲ 傘 鉾



水尾神社の御神威

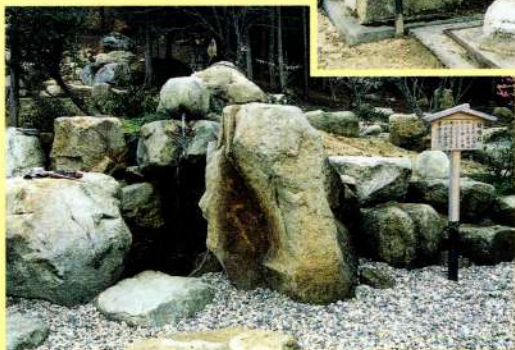
当社の創建年支は不詳ですが、既に奈良朝時代、称徳天皇の天平神護元年（西紀七六五）に神封十三戸（神田）を作る氏子十三戸の奉充があり、桓武天皇の延暦三年に従五位下に叙せられました。これは近江の神社として叙位の正史に出た最初の神社であります。その後度々昇叙が行われ、醍醐天皇の延喜式の制には東山道の大社三八二座の中の、特に官幣大社五座の中の二座（河南社、河北社）を占め、祈年・月次・新嘗・例祭の年四回名神大社として臨時の大祭にも奉幣がありました。

更に靈元上皇は神号の扁額を、光格天皇は神輿用御戸帳を、仁孝天皇は傘鉾を、孝明天皇は神輿用鈴及び鈴緒を夫々献納せられ、また八代將軍吉宗は神輿を奉納し、九代將軍家重は社殿を再興し、共に現存しています。

当社は維新後社運が開けず昔日の面影はありませんが、約二軒南方の大溝町音羽の県道沿い川中の礎石は当社の一の鳥居跡であり、同字の氏神大炊神社も当社の神供の炊殿跡と伝えられていますなど、その社域の如何に広大であったかを窺い知ることが出来ます。また祭典も厳肅且つ広汎に行われて、東北方約五軒の安曇川町西万木の今宮神社並に、青柳村新宮神社（今の太田神社）は、共に当社神輿渡御の御旅所跡と伝えられていて昔の盛儀が推察されます。



▶ 石燈楼
鎌倉中期の作と
伝えられる



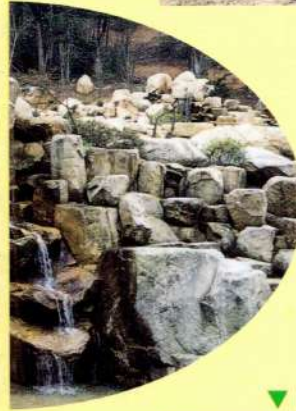
◀ 陰陽石
湧き出る神水は
子宝を授ける

み お 純和風 水 庭園

水尾庭園は平成八年十二月に、地元氏子により手作りで、二年の歳月を掛け完成された純和風の庭園であります。境内より出た約二千個の岩を巧みに組合わせ、広さ約六千平方メートル、大小二つの池を形造っています。



▲ 桜花に映える庭園（春）



▼ 咲誇る菖蒲より太鼓橋を望む（夏）



それぞれの池の中心となる巨岩からは山より湧き出る清水が湯々と流れ落ち、静寂の中にも清々しい水音を響かせています。池の回りには、マツ、ウメ、モミジ等が四季折々の彩を添え、鯉が泳ぐ姿も優雅に見えます。また庭園内より水尾山々頂に通じる遊歩道も整備され、その展望台からは北琵琶湖の雄大なパノラマが開けます。



▼ 真綿で覆われた庭園（冬）



▲ 萬山錦秋の庭園より境内を望む（秋）

